

月は30%で、いずれにも水温との関係がうかがわれる。

## へ 考察

東町の薄井・幣串・宮之浦等には、かつお釣漁船はないが県内外から活餌に対する需要が多く、地区内に多くのまき網があつて、カタクチイワシの採捕が容易でかつ、資源量も多く周年採捕され、蓄養に適した内湾に恵まれていることなど種々の好条件を具備している。現在まき網が19統その内、直接蓄養専業者が7統、外に12統は仲買業者に売渡し、現在仲買業者は2ヶ所で生簀をもち専門的に行なっている。これらはほとんど他の県からくる近海及び遠洋へのかつお釣漁船に活餌の供給を行なっている。同町は長崎県の佐世保・千葉県の館山等につぐかつお餌料の供給地となつている。

① 今回の先進地研修で実際にかつお餌料の供給地である現地を見聞し、まず感じたことは養殖・蓄養業を行なうに適した恵まれた漁場であることと、そこで漁業をいとなむ漁業者がその漁場を有効に利用していることがうかがわれた。

② 本県宮古島には上記のように適した場所がない、その上漁期間に来襲する台風に悩まされている。したがつて東町で行なわれている大規模な蓄養事業はまず不可能かと思われる。

③ 当地で考えられる方法としては、別表3の生簀で各漁船1統の保持・専用が考えられるが、これも各かつお釣漁業者自身の意志にかかつており、台風時を除いて、晩夏から秋にかけて、大量に出現する、ミズン(サッパ)アカムロ(タカサゴ種魚)その他、テンジクダイ等をまき網及び棒受網等をふるに活用し、これらによつて採捕された餌料を1時的に蓄養することは可能である。

④ 次に東町で行なわれている餌料採捕漁具(まき網)について比較してみると、まず薄井では環ワイヤー2本巻き(双手巻)を行ない網地全面を無駄なく、袋状になるようにし、集魚された魚は100%の漁獲をなしている。

宮古でのまき網は環ワイヤー片巻きのため、魚群を途中でできるおそれが充分にあり100%の漁獲はまず困難である。この理由は片巻した場合、船網及び沈子の方が分銅を吊したようにたれ下り、この状態で腕ワイヤーに力が加わると重心が船網の沈子の方に取りられるため、腕網の沈子の沈降が防げられ沈子の方が揚り、魚群を威嚇するおそれが充分にある。そのため双手巻きに替える必要がある。

⑤ また竹籠は活餌運搬用のみに使用されているのに対し、宮古では本土の $\frac{1}{3}$ のサイズの竹籠を蓄養施設として使用している。餌料採捕の面でも今なお多くは素裸潜による(追込・取網)漁法であるため、この面も合理的な改善がなされるべきであろう。

## ト おわりに

また他県とは、漁場・魚種の違いもあつて、本県では近・沿海性のカツオ魚群が多く、瀬付廻